

あかりの歩み



ハリケーンランプ

展示解説書

会期：令和2年 1月4日（土）～3月22日（日）

場所：愛荘町立歴史文化博物館

◆ はじめに

現在では当たり前にある明かり。江戸時代までは、すぐに燃え尽きてしまう草木や、高価な油を燃やすことで明かりを得ていました。その貴重な明かりを長く、安価に使うため、人々はさまざまな工夫を凝らしてきました。

展覧会では、提灯やアセチレンランプといった明かりに関わる道具を展示し、燃料による照明から電気照明に移り変わるまでの照明器具の変化を追います。また、愛荘町にかつて存在した紙燭職人しそくやランプ屋など、照明にまつわる人々の生活も紹介いたします。

その他、明治時代以降に普及した電気によって、いかに人々の生活が変わっていったかをレトロな電化製品とともに紹介いたします。

◆ 焚き火

人類は、草木をそのまま燃やすことで明かりや暖房として利用してきた。焚き火は最も古い照明であり、燃料である木も簡単に手に入るため、長く利用されてきた。また、割り木などを束ねて火を灯すことで携行できるようにした松明たいまつも生まれた。

松明等には、燃料として「肥松」と呼ばれる、松の油分を多く含んだ部分ひでが利用された。

火をおこす道具についても、始めは自然に発火したものを利用していたが、次第に摩擦熱によって発火させる方法や、硬度の高い石で金属を打撃することで生まれる火花を利用して発火させる方法などが生まれた。

人々はより容易で効率的に光を得るために様々な方法が生み出していく。



(写真1) 火打箱と発火道具一式

火口ほくち（左上）に火花を落として火種を作り、付木つけぎ（右上）に移して火を大きくし、火をおこす。

◆ 油

灯火に用いられた油は植物性と動物性があり、日本では魚油も使用されていた。しかし、動物性油は燃やすと悪臭が発生するため、室内で用いることは嫌われていた。

植物性油は最初、ツバキ・イヌザンショウ・イヌガヤなど木の実から取っていたが、やがて大陸から渡来したゴマ・エゴマなどの一年生草本が栽培され、中世ではエゴマの油が主流となった。その後、アブラナを原種とする種油が普及し、江戸時代には、種油が灯油の代名詞になった。



(写真2) 灯心と灯明皿・油さし

◆ 蠟

奈良時代には、蜜蜂の巣を構成する蠟ろうで作った
蜜みつろうろう燭そくが用いられていた。

現在、私たちが使っている蠟燭はいわゆる「洋蠟燭」と呼ばれるもので、日本の蠟燭とは材料や製作法が大きく異なる。16世紀頃から作られた日本の蠟燭「和蠟燭」は漆やハゼの実から採った蠟を、芯はイグサの髄を使う。対して洋蠟燭は石油からとれるパラフィンパラフィンを蠟とし、芯は糸を使う。

和蠟燭は火持ちがよく、消えにくいだが、製作に手間がかかる。逆に洋蠟燭はすぐに消えてしまうが、安価で大量生産が可能である。

和蠟燭は当時でも高価なもので、寺院や武士、裕福な商人のみが使うことができ、一般庶民の手に届くものではなかった。洋蠟燭の輸入によって日本国内での和蠟燭の使用頻度は大きく減ったが、現在でも仏教行事などで使用されている。

ちょうちん 提灯

はじめは灯明による明かりで持ち手がついた行灯のような形であった。

蠟燭が高級品であるため、公家や武士の間では常用されたが、民間では儀礼での使用が主であった。蠟燭の普及や折りたたみ式の提灯の発明によって江戸時代ごろには広く普及した。

本展示品には家紋が入っている。結婚式・通夜は夜に行なわれることが多いため提灯は必須であり、一家にひとつは家紋入りの提灯があったという。

しそく 紙燭づくり

紙燭とは灯明や蠟燭の代わりに使った燈火具である。

愛かり荘町かりま荻間の願生寺では住職が平成20年頃まで紙燭作りを行っていた。

不要になった和紙を細く裂き、長いコヨリを作る。寺で使用した和蠟燭の残りを溶かし、そこにコヨリを浸す。コヨリに蠟が浸透すると引き上げ、しばらく干したのちに紙燭が完成する。

寺の灯明に、輪状に束ねた紙燭を入れて使用した。蠟燭とは違い、蠟が垂れないため便利で

あったという。現在では電化しており、見ることができないが、昔は寺などで簡易的な照明としてよく使用されていた。



(写真3) 紙燭づくり

(『近江愛知川町の歴史 第三巻 民俗・文献編』より引用)

◆ 石油・ガス

石油は飛鳥時代に「越後の燃える水」という記録があったが、灯火に使用し始めるのは幕末からとなる。はじめは「臭水くそうず」と呼ばれていた。

ガス灯が日本で最初に点灯したのは明治初頭で、当時は街灯として使用されており、少し遅れて室内灯にも使われるようになった。当時は石炭を蒸し焼きにしてガスを作っており、その設備や器具など製造に関わるもの全てを海外から輸入していた。

ガス灯は蠟燭や行灯の明かりと比べると当時としては格段に明るいものだった。ガスランプが用いられた際には、「暈の目ひとつひとつが見える」と明るさに驚いたという。

この頃のガス灯は全て裸火で、炎は独特な形状をしており、「フィッシュテール」と呼ばれていた。当時は小さなガス灯を集めて模様をつくることで、屋外の装飾や看板としても使用していた。

ランプ屋

愛荘町愛知川には明治時代から続く森辰商店というガラス製品を販売する店が存在した。

当初はガラス製の食器や哺乳瓶、びん手まりの瓶などを販売していたが、やがて石油ランプを主力に販売するようになる。天秤棒や大八車にランプの部品を載せて行商を行ない、地域の人々には「森辰のランプ屋さん」として親しまれていたという。

◆ 電気

現在、私たちが最も活用している明かりが電灯である。電気は照明だけではなく、身の回りの様々な機械を扱うためにも欠かせない。これまでの生活の道具に必要な燃料やエネルギーも電気に変わり、もはや電気が無くては生活が困難だといえる。

電気が普及し始めたのは明治時代である。電気の普及は全国一斉に行われたわけではなく、電気が通っていない地方ではランプの明かりを使い続けていた。ランプから電灯へ移り変わった大きな理由は、安全性である。灯油の入ったランプは、倒れて灯油がこぼれた際の火災の危険性があった。電灯はその心配がなかった。

◆ 灯火管制

戦時中に夜間空襲や夜間砲撃の目標とならないよう照明の使用を制限したことを灯火管制という。このため、真下にだけ光が来るように塗料を塗った灯火管制用電球や、電灯に被せることで外に光が拡散しないようにする防空カバーなどが発明された。また、灯火管制時の諸注意を記した広告も残されており、戦時中の明かりの様子がよく分かる。

戦争が終わると、灯火管制が解除された。村の様子が一変したといい、各家の明かりがあちこちで灯され、自然と涙が出たという伝承が愛荘町でも残っている。

電灯の登場

はたがわ めかた

秦川村大字目加田（現愛荘町目加田）には大正元年（1912）に電柱を建設するための申請をした記録が残っている。当時の報告書には電灯需要戸数として三八戸と記されており、秦川村全戸数の3.8%しか普及していなかった。

秦川村大字竹原谷（現 竹原）には初めて電灯がついたときの様子が伝承されている。

電気会社の人が「ついたか、ついたか」と大声で道を叫んで回って、竹原谷の住人が「ついた、ついた」と屋外に飛び出して叫んだという。一ヶ月の料金は定額で、五燭*五銭、十燭六五銭で青年団が集金をしていた。

また、電灯がつくとあまりの明るさに家の隅々まで見えて困ったという話や、必要な部屋にのみ電灯を回したという伝承が残っている。

※燭・・・光度の単位。一燭＝蠟燭一本分の光度。

◆ 電気の普及

電気の普及によって、照明だけでなく様々なものが電化された。

国産の家電製品では扇風機やアイロンが初期に登場する。昭和30年頃になるとテレビ・冷蔵庫・洗濯機が「三種の神器」といわれ、家庭生活が大きく変化する。

また、あんかのように電化しても形状がほぼ変わらないものや、計算用具など、時代ごとに形状が大きく変化するものもあり、電気が普及したことによる生活への影響がわかる。



（写真4）幻灯機

上にはランプが刺さっているが、中には電球のソケットが後から付けられている。



（写真5）ニキシー管 電子式卓上計算機と表示画面
城陽市歴史民俗資料館蔵

数字をかたどった発光体がガラスの中に封入されており、それに対応した配線を通電させることで数字を表示させる。
本展示品は8の字の一角一角が発光体でできている。

◆ 展示品（一部）



燭台



提灯



蔵提灯



石油ランプ



ガラス製石油ランプ



ハリケーンランプ



アセチレンランプ



鉄道用小型合図灯



あんか



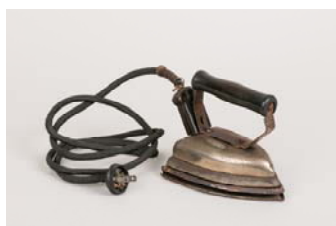
炭アイロン



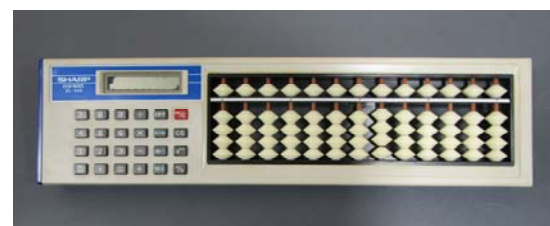
そろばん
算盤



電気あんか



電気アイロン



ソロカル 個人蔵

◆ 展示解説 ◆

[開催日] 令和2年 1月19日(日)
2月16日(日)
3月15日(日)

10:30~ / 13:30~

[場 所] 愛荘町立歴史文化博物館 企画展示室

[参加費] 無料(要入館券)

第30回企画展

あかりの歩み

展示解説書

[編 集] 山本剛史 西連寺匠(愛荘町立歴史文化博物館)

[発 行] 愛荘町立歴史文化博物館

[電 話] 0749-37-4500

[発行日] 令和2年1月4日

© 2020 愛荘町立歴史文化博物館